初夏

山村 千暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初夏

【Ｎコード】

Ｎ６２４４Ｕ

【作者名】

山村　千暁

【あらすじ】

２０歳の女性・梓（あずさ）は、道端で１４歳の女子中学生・巴（ともえ）と出会う。

ある夏の一日を描いた短編小説。

真夏の昼は想像を絶する暑さだった。
私はアスファルトから立ち上る蜃気楼に顔を歪ませてい、さっきまでトボトボと歩いていたが、遂には道端でへばり込んでしまった。
暑い……誰か助けて……。
などと頭に浮かぶが、歩道には私以外誰もおらず、すぐ隣を車が過ぎ去っていくだけだった。
麦わら帽子に白いワンピースにサンダルで、長い黒髪がなびく私は、まるで映画のヒロインだと思ったのに。
そうしてへばり込むこと１０分くらい。
「んー？暑さにやられちゃったのかな？」
と、可愛らしい声が頭の上から聞こえた。
私は視線を上にやると、１４０ｃｍくらいの女の子が私を見ていた。
その子もワンピースだけど、オレンジと白のチェック柄で、髪は短い茶髪。
彼女は私の苦しそうな顔を見ると、
「顔色が悪いね……熱中症かな……だとしたら早いうちに処置をしないと」
と、ポーチからハンカチを取り出し、上を向いたままの私の顔の汗を拭い、額に手を当てると、
「熱っぽいな……近くにコンビニがあるから、頑張って歩こう。それで、ちょっと涼んでアイス食べてジュース飲んだら、きっと良くなるよ」
と、私の腕を掴んで、先導するように歩いた。
私はフラフラだったが、彼女が力強く腕を握ると、自然と弱気でなくなる。
たった3分程だったが、随分長く感じた。気が付けば、私は公園の木の下のベンチに腰を降ろしていて、右手にはソフトクリームを握

っていて、左にはペットボトルのオレンジジュースがあった。
「ありがとう。あなたが見つけてくれなかったら、私は今頃煮干しになってたわ」
「煮干しって……ともかく、顔色も良くなったし、良かった良かった」
余裕が出来ると、こうして逢ったのも何かの縁だと、私と彼女は自己紹介をした。彼女は巴（ともえ）と言って、この街に住む中学二年生らしい。ちなみに私は梓（あずさ）と言う名前で、今年で２０歳。身長は１６５ｃｍ。
「梓ちゃんは大学生なの？」
と訊かれ、
「まあ、一応は大学生なんだけど、あんまり通えてなくて大半家にいるの」
「通えてない？ちゃんと大学行かなきゃダメだよ」
と言われ、結構堪える。
「実は小学校の時から家から出ることが少なくて、なかなか外出するのが億劫で……」
と言うと巴は驚き、
「えっ、小学校から？授業受けなかったの？」
「家に家庭教師の人が来てくれてたかな」
「梓ちゃん、肌がすっごい白いのは出掛けなかったからなのか……」
「まあ、そうだね」
「へええ……もしかして、梓ちゃんちはお金持ちなの？」
巴は私をお嬢様と思っているらしい。外出せず、先生に来てもらうと言えば、まぁそう聞こえなくもない。
「まあ、そんなとこかな」
私は嘘をついた。身の上話はしたくなかったし、そっちの方が幸せだろう。
「うわぁ、お嬢様なんて初めて見たよ」
「見る目が変わった？」
「少し……それより、外出しないお嬢様が何で道端で干からびてた

の？連れの人はいなかったの？」
私はお嬢様という設定を貫くため、適当な嘘を考えて淡々と答えた。
「私が連れの人に、一人で外出したい、って言ったの。だから私は一人だった。ほら、この麦わら帽子もワンピースもサンダルもあんまり使わないから全然汚れてない」
「なるほど」
「それより、私はこの辺りをよく知らないし、適当に案内してもらっていい？」
「まぁここは何にもない街だけどね。私がよく行く場所でも案内するよ」
巴が立ち上がった。私も立ち上がったが、足元がおぼつかない。
「やっぱり熱かな。と言っても今日はまだ涼しい方だけど」
「歩くのが辛くて……」
「私が引っ張れば少しは楽だよ」
巴が私の腕を握った。文字通り引っ張るつもりらしいが……
「あの……出来れば手を繋いでもらった方がいいかな」
「あっ、そっちの方が良いね。ごめんごめん」
巴は一端腕を放し、手を差し伸べた。私も手を伸ばし、繋いだ。

巴は『何もない街』等と言っていたが、それが社交辞令だったと気付くのにはそんなに掛からなかった。
大きい神社、ローカルなスーパーマーケット、巴が通う中学校、格安のカラオケ、レンタルCDショップ、大きい本屋、そして今いる河原。
巴は手を握ったまま、休む間もなく喋り続けていた。私がそんなに喋らないから間を持たせようとしていたのか、或いは単におしゃべりなのか。
巴が嬉しそうに、自慢話や、友達の話や、観光スポット（？）の話をする度、私が笑っていたからだろうか。
私が笑っていたのは、巴の話が面白かったからという、それだけで

はない。
巴がにこにこしながら話をしているときの顔を見ていると、私も顔が自然と笑ってしまうのだ。
私には兄弟がいない。
だから、もし私に妹がいたら、こんな感じなんだろうかと考えたりしているうちに、巴が実の妹の様にも思えてきて、お姉さん振ってみたくなるのも事実だった。
時間は、あっという間に過ぎていった。

夕方になった。
私たちは、私がへばり込んでいた道の近くに立っていた。
昼はあんなに暑かったのに、夕方は涼しい。
「ありがとう。家はもう近くだから」
「今日は楽しかったよ。また今度、カラオケ行こうね」
「うん、それまでに歌の練習しとくよ」
名残惜しくも、私は
「じゃあね。ありがとう」
と言った。
「うん。ばいばーい」
と陽気な返事を聞いて、なにか納得したように、笑顔で返し、振り返って歩いていった。

少し歩いて角を曲がるとベンチがあり、それに腰掛けると、私は息を荒げて、横になった。目を瞑ると、心臓の音が頭に響き、全身が煮えたぎるように熱い。そのうち何も考えられなくなり、私の意識は途切れた。

目が覚めると、白い天井、右を向くと、窓から心地の良い風、左を向くと、悪い風邪を引いたかのように青ざめた顔の母。私と目が合

うと、怒られた子供のような寂しい顔になった。
「なんて無茶をしたの」
母は言った。
「時間がなかったから……」
私は呟くような小声で言った。
「あと一ヶ月と持たないのは分かってる。でもこのまま終わりたくなかった。夏も冬も、私にとっては窓ガラスの外の世界。私はずっと、自分が生きてるのが分からないまま生きてきた。だからお別れする前に生きていることを実感したかっただけ。私の考え、間違ってる？」
私は半身を起こし、壁にもたれ掛かって窓を向いた。
「私は初めて友達が出来たし、初めてコンビニにも本屋にも行った。初めてお姉さんにもなったし、初めて妹も出来た。もう思い残すことはないわ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6244u/

初夏

2011年10月5日16時01分発行